

#1 **prince**<sup>®</sup>  
40年のステイタス!



Vincent Van Patten

ビンセント・バンパタンが'81年セイコースーパーテニスで優勝したことで、日本にデカラケパワーを認めさせた

誕生から40周年を迎えるプリンスが築いてきたイメージは、まさに「ブランド」。世界中に愛された【グラファイト】こそ、プリンスそのものだった。33年間も発売され続けてきたラケットは【グラファイト】しかないが、プリンスは故きを守るばかりではなく、ラケット構築技術では最先端を走る。そんなプリンスというブランドの横顔を見てみよう。

文/松尾高司 (KAI project)



'76 prince GRAPHITE OS

最初の【グラファイト】はシャフト全体が長くくびれ方が強いため、しなり感が強く、独特な打感があった

デカラケが世界を変えた

近代テニスのラケットは、数段階の「イノベーション」を経て進化してきた。「レギュラーウッド」からの最初のイノベーションは「素材革命」だったが、それは「テニスの世界観」を変えてしまうほどではなかった。

世界中のテニスプレイヤーを驚かせたラケットが登場するのは1976年。当時としては異様な姿のプリンス【クラシック】は、これまでの約70平方インチを一気に110平方インチという巨大なフェイスに拡大してしまう「ラケットの怪物」だった。

これを考案したのは、『ヘッド社』の創始者であるハワード・ヘッド氏だ。彼はテニスを趣味にしていたが、その腕前はお粗末そのもの。あの小さなフェイスのラケットでは、ボールがラケットの真ん中ではずれると、ラケットがグリッと回されてしまい、打球は見当違いの方向へ飛んでいってしまう。「ボールが真ん中に当たらなくても、ちゃんと飛んでいくようにできないか?」と2年間も考え続けたヘッド氏が辿り着いた結論が「デカラケ」だった。デカラケの面の幅の広さは、回転慣性を高め、ちょっとくらいオフセンターショットしても、ミスにはならずネットを越えてくれる。

「むずかしさを克服するのが美学」とされていたテニスの世界観を、世界初のラージサイズラケット『プリンス クラシック』が、一変させた。デカラケの登場によって、テニスを楽しむ人々が爆発的に増加し、世界的な大テニスブームを巻き起こしたのである。

デカラケの真の価値

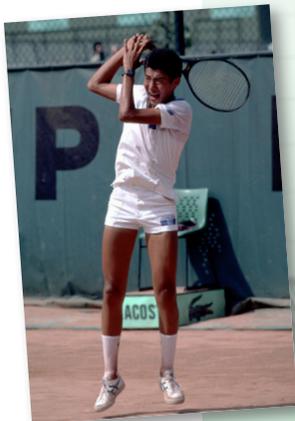
当時はまだ、「上手な人ほどむずかしい道具を使うものだ」という固定観念に縛られている時代で、「デカラケは初心者を使うもの。経験者がデカラケを使うと、テニスがヘタになる」などとテニスショップでさえ言っていた。なんとも古くさく、非合理的な考え方である。

さて、そんな根拠なき中傷に風穴を開けたのが、1978年のUSオープン女子決勝に登場した16歳の Pam・シュライバーだった。183cmの彼女の右手には、なんとプリンス【クラシック】が握られていたのである。

世界中が「えっ? デカラケをプロが使っているの? しかもそれでUSオープン決勝に?」と注目した。さらに次々とデカラケを使うプロの登場を見て、「自分たちも使っていいんだ!」と気付いた。

じつは彼らにとってこそ、デカラケは「メリットのカタマリ」だった。飛ばないラケットで「押し出すようにスウィングしましょう」と教えられてきたテニスを、一気に変貌させたのがデカラケだったと言っても過言ではない。

「力いっぱい強打しても、強烈なスピんがかかるからコート内に収まる」ことで、それ以来、プロテニスは一気に高速化することになる。



Shuzo Matsuoka

我らが松岡修造もジュニア時代はプリンス党だった。【GRAPHITE】や【PRECISION GRAPHITE】を愛用



'76 prince CLASSIC

世界初のデカラケはアルミ製モデル【CLASSIC】。それまでむずかしかったテニスが簡単になって、大ブームとなる



Pam Shriver

Pam・シュライバーが'78年全米決勝で使ったのは【CLASSIC】だったが、後に【PRO】【BORON】と変遷



Carling Bassett

アメリカの大富豪の娘に生まれ、美人選手で有名なカーリン・バセットも【WOODY】【GRAPHITE】を使用



## '99 TRIPLE THREAT GRAPHITE

2時&10時&6時の3方向へ加重して面安定性を高めた【TT GRAPHITE】。この機能は他モデルにも応用された



## Pat Cash

オーストラリアが生んだパット・キャッシュは、最後のメタル系とも言われる【MAGNESIUM PRO 90】で全英制覇



## '86 SPECTRUM COMP

真っ白いボディに緑と青のビンストライプがあまりに美しい。女性に大人気だったが、性能は男性でも大満足



## Gabriela Sabatini

ガブリエラ・サバティニは、14歳のプロデビュー当時は【WOODY】。後に初期【GRAPHITE】連続グロメット型を愛用



## Andre Agassi

全仏・全米でベスト4に残り、ATP3位に躍進した88年。金髪フサフサ時代のアガシが使うのは【GRAPHITE】



## Monica Seles

プロデビュー翌年、16歳で全仏を制したセレスの武器は【GRAPHITE】。左右両手打ちの激しいテニスだった



## Patric Rafter

ラフターは、【PRECISION CRONOS】【GRAPHITE RESPONSE T1】【TT WARRIOR SP TG】のプリンス遍歴

## 「グラファイト」という名器

こうしてプリンスは「ゲテモノ扱い」から「最先端」へ大出世を遂げる。その地位を確固としたのが、ハイエンドモデル【グラファイト】だった。当時としては硬いグラファイトのフレームでありながら、なんともいえない「しなり感」と「球の乗り感」は、まさに秀逸! 当時の【グラファイト】は、日本円で9万円もする超高級ラケットなのに、そのファンは世界中に広まり、時代に応じて細かなセッティングを変えながら、いまだにこれ愛してやまないプレイヤーが数え切れないほどいる。

そしてこの【グラファイト】こそが、プリンスに「ステイタス」をもたらした。まさに「特別なもの」……、【グラファイト】は一般プレイヤーたちの憧れであり、それを使う満足感は、テニスする喜びの一つだった。それは「高価だから」ではない。あえて言うならば……、【グラファイト】だから。

かつて数多くのトッププロが【グラファイト】を愛用した。ジーン・メイヤー、ピンセント・バンパタン、カーリン・バセットやガブリエラ・サバティニ、アンドレ・アガシ、マイケル・チャン、モニカ・セレス、杉山愛、ファン・カルロス・フェレーロ、ニコライ・ダビデンコなど、本当にたくさんのプレイヤーが信頼を寄せた。使用者を裏切らない「打感」が、トッププロの道具として認められた理由なのである。

## 「長ラケ」というイノベーション

マイケル・チャンはプロデビューのときから、【グラファイト】を武器としていた。男子アジア人プレイヤーとして、もっとも高いランキング「ATP 2位」にまで辿り着いたチャンは、ある秘密を持っていた。

それは「彼の【グラファイト】は長い」ということ。175cmという身長は、欧米のプレイヤーに対して明らかに不利な条件。それをカバーしたのが類い希なる機敏なフットワークで、1989年にはプロ入り2年めにして全仏で優勝を掴み取った。

ただ、どんどんサーブが高速化する男子プロテニスにあって、彼の身長はますます不利となり、チャンはそれを補うため、ラケットのグリップを約1インチも長くし、少しでも高い位置でインパクトできるようにした。これが「長ラケ」ブームを巻き起こした。

プリンスは彼の名を冠して【マイケル・チャン グラファイト】を世に送り出した。プリンスがプレイヤーの名をラケットに付けたのは、唯一、このモデルだけである。グランドスラム決勝から遠ざかっていたマイケル・チャンは、この長ラケを使って、1996年、全豪とUSオープン両方でみごと決勝進出を果たしたのだった。もちろん、「長ラケ」は多くの一般プレイヤーにも性能的恩恵を与えることができたのだった。

## '96 Michael Chang GRAPHITE

身長の劣勢を補うため、チャンは1インチ長いラケットを使う。それをモデル化したのがこれで、長ラケブームを呼ぶ



## Michael Chang

アジア人プレイヤーとして最高位の3位まで上ったチャンは、身体的デメリットを、機敏なフットワークでカバーした



## '09 EXO³ THUNDER 118

現在、市販されるラケットでもっとも先鋭的な構造を持つ【EXO³】シリーズのハイエンドモデル



## Ai Sugiyama

長い現役生活において、つねにともな戦ってきたのがプリンス。最後の武器は【O³ SPEEDPERT BLACK】



## O³ TOUR

【O³】シリーズのツアータイプ。ニコライ・ダビデンコは、このラケットを使うようになってめきめきと頭角を現わした



## Daniela Hantuchova

モデル並みのスタイルを持ち、実力を兼ね備えた美人プレイヤーであるハンチュコワは【O³ SEVEN】を採用



## Maria Sharapova

美人で有名なシャラポワだがプレイでは大きな声を出してつねに攻撃姿勢。【EXO³ BLACK】が彼女の武器



## '08 EXO³ REBEL 95

アドバンスプレイヤーが求める打球性能を【EXO³】システムに取り入れたツアーシリーズの人気モデル

## 構造革命【MORE】が生んだ未知のラケット【O³】

プリンスが世に送り出した【MORE】構造には「つねに先を見続ける技術者魂」を強く感じさせられた。ラケットの製造に精通する者が見れば「そうか! こんなやり方があったのか!」と驚かされる画期的発想。

「ハーフフレームを2本作って、それを貼り合わせることで強靱なフレーム剛性を生み出す」。貼り合わせ部に素晴らしいアイデアを盛り込み、フレームにドリルで孔をあけることなく……つまりカーボン繊維を断裂させることなくグロメットレスのストリングホールを形成してしまったのだ。

この【MORE】構造が実現したことで、プリンス社のラケット構築技術は飛躍的な進歩を見せ、ついにはフレームに大きなストリングホールをあけて、空気抵抗を大幅に減らしながら、スウィートエリアを広げるシステム、【O³】構造が誕生することになる。

あらゆるタイプのプレイヤーにとって「スウィングのしやすさ」「スウィートエリア拡大」は明らかなメリット。もちろんそれはプロにとっても同じこと。

シャラポワ、ダビデンコ、ハンチュコワ、杉山らは、そのパワーを自分のプレイに最大に活用した。とくに杉山は、それまで使用していた【ウォリアー】【ハリヤー】系から【O³ ホワイト】【O³ スピードポートブラック】へ移行したことで、選手生命を伸ばすことができたのではないかとと思われる。



## '04 TOUR NX GRAPHITE

高剛性とグロメットレスを実現した【MORE】構造を搭載するツアースペックモデル。賞讃すべき開発力である

## 重量配分に着目! 【EXO³】への進化と【Type-J】

穴があいていることで【O³】は大きな注目を浴びたが、プリンスがここから導き出した「次の技術」がある。穴のおかげで、その部分の重量が減ることになったが、その両外側に重量を重点的に配分することによって面安定性を高めるというのが、新機軸【EXO³】テクノロジーだった。

これは高反発系モデルで究極的な姿となる。従来のストリングルートは大きな空洞となり、そこに超軽量で強靱なカーボンだけでできたエナジーブリッジが架けられ、これがストリングを支えることとなるのだが、このおかげでストリングの支点はさらに外側に拡大され、結果的にフレームサイズのイメージ以上のスウィートエリアとパワーを発揮したのだ。

もちろんこの技術は競技を意識したツアーシリーズにも応用され、楽しむテニスから競技層まで、あらゆるプレイヤーたちにメリットを響ける。

プリンスはどのメーカーよりも、はるか先を見つめている。今までは考えられなかったようなラケットが、目の前に現実として見せられる。現在のテニスラケットは、技術開発に関し、総じて「どん詰まり状態」にある。そんな中で、プリンスだけが目を見張るような「技術力」を見せつける。それが『現代のプリンスラケット』なのだ。

そして先頃、プリンスから最新情報が届いた。【EXO³】3モデルに新しく、日本のプレイヤーが好む「球の乗り感覚」を追求したスペシャルモデル【Type-J】がラインナップされる。カーボン素材のレイアップを変更することで最高の打球感を実現。またスウィングウェイトを「285」に設定して操作性を高め、イメージどおりのコントロール性を追求した。ジャパンオリジナルデザインを纏い、ひと味違う【EXO³】の登場だ。



## Gael Monfis

プリンスの最新鋭システムを搭載するツアーモデル【EXO³ REBEL 95】を使用するガエル・モンフィス



## '10 EXO³ GRAPHITE 100S

日本のプレイヤーが好む「打球の乗り感覚」を強調し、操作性を向上させたスペシャルバージョン【EXO³ Type-J】